



元 WBC 世界バンタム級チャンピオン

山中 慎介

special × interview

代表取締役

工藤 成峰

未来に続く、父子の絆

▽80年代、バブルに沸いた建設業界も、その後の平成不況、リーマンショックで厳しい時代が訪れた。そんな中で会社を守り続けた工藤社長のお父様が、当時のお話を聞かせて下さった。建設業界全体が厳しい状況下にあっても、お父様は「人を大切に、真面目に頑張れば良いことがある」と信じて進み続けたのだという。そして、どんなに小さな仕事でも快く引き受け、お客様の要望に最大限応えられるよう努力を重ねてきた。お父様は、「私には、この道のプロです。お客様からお金をいただいている以上、期待以上の仕事で応えなければなりません」と、職人としての矜持を語ってくれた。

▽そんなお父様は、言葉にはしなかったものの、内心では社長に継いでほしいと思っていたそうだ。「息子がものづくりが好きなのは分かっていたから、実際にやり始めれば、自然と自分でやるようになるだろう、と」とのお父様の言葉に、社長も思わず笑みをこぼす。もちろん、お父様の考え通りになったことは言わずもがな。息子は、今では経営者として会社を継ぐまでに成長した。父子の絆を礎に、「工藤建設工業」はさらなる成長を目指して進み続ける。



父親が築いた基盤を守り、成長させ 会社の継続と発展を目指す



創業から20年以上にわたり、地域密着で信頼を重ねてきた『工藤建設工業』。設備工事に始まり、徐々に業容を拡充し、現在は土木工事や管工事、水道工事、型枠工事、舗装工事、解体工事、除排雪作業などを通じて地域に貢献している。本日は元 WBC 世界バンタム級チャンピオンの山中慎介氏が同社を訪問。父親である会長から会社を引き継ぎ、守り続けている工藤社長にインタビューを行った。

—まずは、『工藤建設工業』さんの沿革から伺います。

当社は、塗装会社に勤めていた父が39歳の時に立ち上げた会社です。当初は設備工事業を手掛けていましたが、人とのつながりが広がって様々な依頼をいただくようになり、今では土木工事を主軸としています。実は、今でこそ私は二代目となっていますが、昔は同じ道に進みたくないと思っていたのです。

—そうだったのですか。それは何故でしょう。

ここ青森県は雪国ですから、水道管が破裂するなどの緊急の工事が入ってくると、休日だろうと深夜だろうと、雪の中を飛び出していく父の姿を見ていました。さらに、除雪作業もあり、子どもながらに「大変な仕事なんだな」と。また、私が高校生のころにはリーマン・ショックの影響もあり、建設業界全体が厳しい状況下にありました。当社も例に漏れず、今でこそトラックやダンプカー、重機などを多く所有していますが、当時はそれらの多くを手放さざるを得ない状況だったのです。それもあってか、両親からも後を継げなどとは言われず、学校を

出たら一般企業に就職するつもりでいました。

—それが、今こうして後を継いでおられるのは、何かきっかけが？

高校生になってから、少しずつ家業を手伝うようになって、この仕事の面白さを知っていきました。最初は型枠工事から始めたのですが、釘を打つだけでも楽しかったですね。とはいえ、当時はバンド活動に熱中しており、高校卒業後は別の会社に勤めながらバンド活動をしていました。しかし、鳴かず飛ばずの状態が続き、仕事も辞めてしまって、ニートのような状態になっていた時に、父から「うちの仕事を手伝ってみないか」と言われて、19歳で家業に入ることとなりました。

—そうして、父子で歩み出したわけですね。

最初のころは、喧嘩もたくさんしました（笑）。でも、こうして続けていくことができたのは、父を始めとして周囲の方々のお陰だと思っています。私が入社したのは東日本大震災の直後で、父は福島県の復旧工事に携わっていました。私も、被災者の方々のためにできることをしたいと思っていたのですが、実際は力不足で何もできず、もどかしさを感じていました。それから一作業員として経験を積む中で、毎日父や先輩方が、夜遅くまで現場や事務所に残って働く姿を見るようになり、本当に格好良いな、と。自身の研鑽や会社の成長のために、苦勞を厭わないその姿勢に憧れるようになっていったのです。何かを突き詰めるための苦勞であれば、自ら進んでやろうと思う

ようになりました。

—工藤社長は実直な方でいらっしゃる。そして、それはお父様や周囲の方々から受け継いだものなのですね。

父からはよく、「まだ大丈夫、とやらないまましていると、10年、20年経ってもずっとやらないままになってしまう。だから、やろうと思ったらすぐにやれ」と言われていました。私自身、どんなことでも続けることにこそ意味があると考えています。職人としての技術も、一朝一夕で身につくものではありません。それでも、苦勞を厭わずに努力を重ねていけば、それは必ず役に立つのだと思います。

—まさに“継続は力なり”ですね。口で言うのは簡単ですが、実際に行動に起こすのが難しい。お父様方や社長は、それができる方々なのだと思います。

そうでありたいですね。正直、一人ではここまですることはできませんでした。今は従業員も増えて、人材の育成や、福利厚生などの待遇の整備にも尽力しています。人材の育成は難しく、どうしても定着してくれるのか、随分と悩みました。福利厚生などの基盤整備をすると共に、従業員と一対一で話をする時間を取るなど、一人ひとりに寄り添うことを心がけていくと、徐々に定着するようになっていったのです。

—努力を怠らない社長だからこそでしょう。お仕事をされる上で、従業員の皆様大切にしてほしいことなどはありますか。

礼儀礼節を大切にすること、そして筋を通すということを中心に置いてほ

しいです。お客様や周囲の方々への尊敬の念を忘れずに、一つひとつの工事を一生懸命取り組んでほしい。それを重ねていけば、自然と結果はついてくるのだと思います。

—目の前の仕事に精一杯取り組むことが、成長につながるのでしょうか。最後に、今後についてお聞かせ下さい。

父から会社を引き継いで、ようやく軌道に乗ってきました。未来に向けて、会社を存続し、働いてくれる従業員やその家族の生活を守っていくことが私の役目です。そのためにも、まずは良い仕事をしてお客様に喜んでいただき、それが結果として売上につながってくれたら何よりですね。ただ、利益だけを追いかけると、大切なものが見えなくなってしまいます。関わっている方々皆が幸せになれるにはどうしたら良いか、それを常に考えながら、皆で進んでいけるように尽力していきたいです。

(2021年3月取材)

After the Interview

「お若い人も多く、活気にあふれた『工藤建設工業』さん。工藤社長は、先代であるお父様の意志を受け継ぎ、立派に会社を守っておられます。ただ、社長は決して驕ることはなく、「会社を継続していくのは大変なことだと思います」と語っておられました。その真面目で実直な姿勢があるからこそ、こうして着実に成長してくることができたのだと思います」 山中 慎介・談

株式会社 工藤建設工業

青森県東津軽郡平内町松野木字家岸 23-2